

C 結果

[平成9年度調査]

1. 属性(年齢および居住地域)

年齢別では、25歳以下が39.6%、26歳以上が52.2%であった。居住地は、東京都内が31%、神奈川・千葉・埼玉県が36.5%、その他が32%であった。

2. 「性的空間利用」の頻度とエイズの知識・性行動の関係

ここでは、「性的空間」の利用の頻度と、HIV/エイズについての知識や性行動の関連性の有無について考察する。なお分析にあたっては、「性的空間利用者」と「性的空間非利用者」という分類にしたがって集計を行っているが、「性的空間利用者」とは同性愛者が集まる施設及び利用する媒体のうち、主として性行為を目的としていると思われるサウナ、ボックス、公園、トイレ、売春斡旋店(売り専)のうち、ひとつでも「よく利用する」、「ときどき利用する」と答えた人のこととし、それ以外の人を「性的空間非利用者」とした。

性的空間利用者(n=84)と性的空間非利用者(n=

151)ごとの一般知識の正答率を図1に示す。「健康に見えてもHIVに感染していることがある」では正答率に有意差が見られたが、それ以外では差はなかった。

次に、HIV感染につながる性行為に関する「リスク行為の認識」および「性行動」、「コンドーム使用の意識」を表1に示す。「リスク行為についての認識」については、「口内射精」、「コンドームを使わないフェラチオ」、「肛門内射精」の項目において、性的空間利用者に比べ性的空間非利用者のほうが、有意に高い割合を示した。「性行動」については、「肛門性交」の経験率で性的空間利用者の方が有意に高い割合を示したが、フェラチオ時および肛門性交時のコンドームの使用率、口内射精、肛門内射精について有意差はみられなかった。「コンドームを使いたいということについて」で「必ず言える」と答えた人は、性的空間非利用者のほうが性的空間非利用者に比べ、有意に高い割合を示したが、「コンドームを持ち歩くこと」で「いつも持ち歩く」と答えた人は、性的空間利用者のほうが性的空間非利用者に比べ、有意に高い割合を示した。

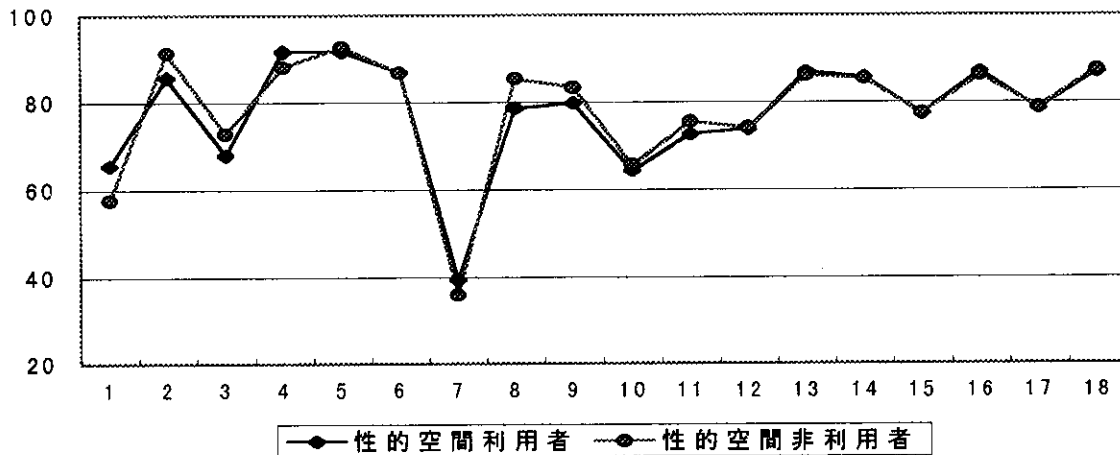
表1 性的空間利用とリスク行為の認識、性行動、コンドーム使用についての意識 (H9年度調査)

	性的空間利用者 84人 n(%)	性的空間非利用者 151人 n(%)	全体# 255人 n(%)	検定
感染リスク行為としての認識				
軽いキス	4(4.8)	4(2.6)	8(3.1)	
ディープキス	21(25.0)	23(15.2)	51(20.0)	
口内射精	69(82.1)	136(90.1)	220(86.3)	p<0.05
コンドームなしのフェラチオ	27(32.1)	73(48.3)	111(43.5)	p<0.01
肛門内射精	74(88.1)	141(93.4)	231(90.6)	p<0.05
性行動(経験率)				
フェラチオについて	64(76.2)	77(51)	150(58.8)	
コンドーム使用	7(10.9)	10(13)	18(12.0)	
口内射精(コンドームなし)	9(14.1)	12(15.6)	22(14.7)	
肛門性交について	34(40.5)	29(19.2)	68(26.7)	p<0.05
コンドーム使用	21(61.8)	18(62.1)	40(58.8)	
肛門内射精(コンドームなし)	5(14.7)	3(10.3)	8(11.8)	
コンドーム使用の意識				
必ず言える	25(29.8)	61(40.4)	91(35.7)	p<0.05
相手に言う	38(45.2)	61(40.4)	106(41.6)	
こと	8(9.5)	6(4.0)	16(6.3)	
あまり言えない	13(15.5)	9(6.0)	23(9.0)	
言えない	13(15.5)	9(6.0)	23(9.0)	
いつも持ち歩く	19(22.4)	18(11.7)	40(15.7)	p<0.05
持ち歩く	18(21.2)	37(24.5)	58(22.7)	
こと	25(29.4)	38(24.7)	67(26.3)	
あまり持ち歩かない	16(18.8)	52(33.8)	73(28.6)	
持ち歩かない	16(18.8)	52(33.8)	73(28.6)	

注) 性的空間利用者:主に性行為を目的として利用する施設(サウナ、ボックス、公園、トイレ、売春斡旋店(売り専))のいずれかを「よく利用する」、「ときどき利用する」の回答者。 性的空間非利用者:それ以外を回答した者。

#:性的空間利用が不明を含む。

図1 性的空間利用と一般知識の正答率(9年度)



- | | |
|--------------------------|-----------------------------|
| 1 AIDSの延命治療はできない | 10 ヘルペスは性行為でうつる |
| 2 健康に見えてもHIVに感染していることがある | 11 クラミジアは性行為でうつる |
| 3 感染後2-3日でHIVに感染しているかわかる | 12 蚊や他の昆虫に刺されるとHIV感染の可能性はある |
| 4 出産時にHIV感染の可能性はある | 13 食器類からHIVにうつる可能性はある |
| 5 注射器の回し打ちはHIV感染の可能性はある | 14 プール・風呂からHIVにうつる可能性はある |
| 6 体液との接触があればHIV感染の可能性はある | 15 バスタオル・シーツからHIVにうつる可能性はある |
| 7 性病にかかっているとHIVに感染しやすい | 16 握手・抱擁からHIVにうつる可能性はある |
| 8 梅毒は性行為でうつる | 17 せき、くしゃみでHIVにうつる可能性はある |
| 9 淋病は性行為でうつる | 18 保健所では無料・匿名でAIDS検査が受けられる |

3. エイズへの関心と知識・性行動

ここでは、「エイズへの関心」の程度と、HIV/エイズについての知識や性行動との間の関連性について考察する。なお、「エイズについて関心を持っていますか」の設問に「関心がない」「その他」と答えた人を「無関心層」、「関心を持っている」と答えた人のうち、その理由として「感染しているか不安になったことがある」「自分も感染の可能性はある」「身近に感染者がいる」「自分が感染している」をあげた人を「能動的関心層」、「テレビなどの印象が残っている」「教育を受ける機会が多かった」と答えた人を「受動的関心層」としている。

能動的関心層 (n=193)、受動的関心層 (n=21)、無関心層 (n=25) ごとの一般知識の正答率を図2に示す。「淋病は性行為でうつる」、「蚊や昆虫で HIV に感染する」、「プールや風呂でHIVに感染する」の項目で、「能動的関心層」の正答率は、「受動的関心層」「無関心層」よりも有意に高い割合を示した。それ以外の項目でも、「能動的関心層」の正答率は、他の2グループに比べ高い傾向にあった。

次に、「リスク行為の認識」および「性行動」を表2に示す。「リスク行為の認識」においては「口内射精」の項目

において、無関心層に比べ能動的関心層・受動的関心層のほうが、有意に高い割合を示した。また、「肛門内射精」において有意差は見られなかったものの、能動的関心層の割合が、口内射精と同様、最も高い割合を示した。「性行動」においては、3グループ間で有意差はいずれもみられなかったが、「フェラチオ」および「肛門性交」の経験率において「能動的関心層」のほうが他の2グループに比べて、高い割合を示した。フェラチオおよび肛門性交時のコンドームの使用割合でほとんど差は見られなかった。

4. HIV感染者との交流と知識・性行動

ここでは、HIV感染者との交流の有無と、HIV/エイズについての知識や性行動との間の関連性について考察する。なお、「身近にHIV感染者/エイズ患者がいる」と答えた人を「感染者との交流あり」とし、「身近にいない」と答えた人を「感染者との交流なし」とした。

感染者との交流あり (n=60)、感染者との交流なし (n=185) ごとの一般知識の正答率を図3に示す。「延命治療はできない」、「感染後 2-3 日で HIV に感染しているかわかる」、「性病に罹っていると HIV に感染しやすい」、「クラミジアは性行為でうつる」、「蚊や昆虫で HIV

に感染する」、「タオルやシーツで HIV に感染する」、「せきやくしゃみで HIV に感染する」の項目で、「感染者と交流あり」と答えた人の正答率は、「感染者との交流なし」と答えた人よりも、有意に高い割合を示した。

次に、「リスク行為の認識」および「性行動」、「エイズへの関心」を表3に示す。「リスク行為の認識」においては、有意差は見られなかったものの、「口内射精」および「肛門内射精」において感染者との交流ありのほうが感染者との交流なしよりも、高い割合を示した。「性行動」にお

いては肛門性交および肛門性交時のコンドームの使用割合で感染者と交流ありの方が、感染者と交流なしよりも有意に高かった。フェラチオおよびフェラチオ時のコンドームの使用割合においても、有意差はみられなかったものの、感染者との交流ありの方が高い割合を示した。「エイズへの関心」においては、「能動的関心層」の割合は感染者との交流ありのほうが交流なしよりも、有意に高い結果が示された。

表2 AIDS への関心とリスク行為の認識、性行動 (H9 年度調査)

	能動的関心層 (193人) n(%)	受動的関心層 (21人) n(%)	無関心層 (25人) n(%)	計 (255人) n(%)	検定
感染リスク行為としての認識					
軽いキス	5(2.6)	1(4.8)	2(8.0)	8(31.4)	p<0.01
ディープキス	38(19.7)	5(23.8)	5(20)	51(20)	
口内射精	176(91.2)	19(90.5)	18(72)	220(86.3)	
コンドームなしのフェラチオ	82(42.5)	10(47.6)	14(56)	111(43.5)	
アナルで射精	183(94.8)	18(85.7)	22(88)	231(90.6)	
性行動(経験率)					
フェラチオについて	125(64.8)	8(38.1)	12(48)	150(58.8)	
コンドーム使用	16(12.8)	1(12.5)	1(8.3)	18(12)	
口内射精(コンドームなし)	21(16.8)	0(0)	0(0)	22(8.3)	
肛門性交について	62(32.1)	2(9.5)	3(12)	68(26.7)	
コンドーム使用	36(58)	1(50)	2(66)	40(58.8)	
肛門内射精(コンドームなし)	8(12.9)	0(0)	0(0)	8(11.8)	

能動的関心層:「感染しているか不安になったことがある」「自分も感染の可能性がある」「身近に感染者がいる」「自分が感染している」を理由に関心ありと回答した者

受動的関心層:「テレビなどの印象が残っている」「教育を受ける機会が多かった」を理由に関心ありと回答した者

無関心層:「関心がない」「その他」を回答した者。 # 全体は AIDS への関心不明を含む。

表3 感染者との交流とリスク行為の認識、性行動の関連 (H9年度調査)

	感染者との交流あり (60人) n(%)	感染者との交流なし (185人) n(%)	全体 (255人) n(%)	検定
感染リスク行為としての認識				
軽いキス	0(0)	8(4.3)	8(3.1)	
ディープキス	7(11.7)	42(22.7)	51(20)	
フェラチオでの口内射精	57(95)	157(84.9)	220(86.3)	
フェラチオで射精なし	25(41.7)	84(45.4)	111(43.5)	
アナルで射精	58(96.7)	167(90.3)	231(90.6)	
性行動(経験率)				
フェラチオ	45(75)	102(55)	150(58.8)	
コンドーム使用	8(17.7)	10(9.8)	18(12)	
口内射精(コンドームなし)	7(15.6)	14(13.7)	22(14.6)	
肛門性交	27(45)	39(21.1)	68(26.7)	p<0.05
コンドーム使用	21(77.8)	18(46.2)	40(58.8)	p<0.05
肛門内射精(コンドームなし)	3(11.1)	5(12.8)	8(11.2)	
AIDSへの関心				
能動的関心層	55(91.7)	132(71.4)	193(75.7)	p<0.01
受動的関心層	1(1.7)	20(10.8)	21(8.2)	
関心なし・わからない層	2(3.3)	22(11.9)	25(9.8)	

感染者との交流あり群:「身近に HIV 感染者/AIDS 患者がいる」の回答者。

感染者との交流なし群:「身近にいない」の回答者。 # 全体は感染者との交流不明を含む。

図2 エイズへの関心と一般知識の正答率(9年度)

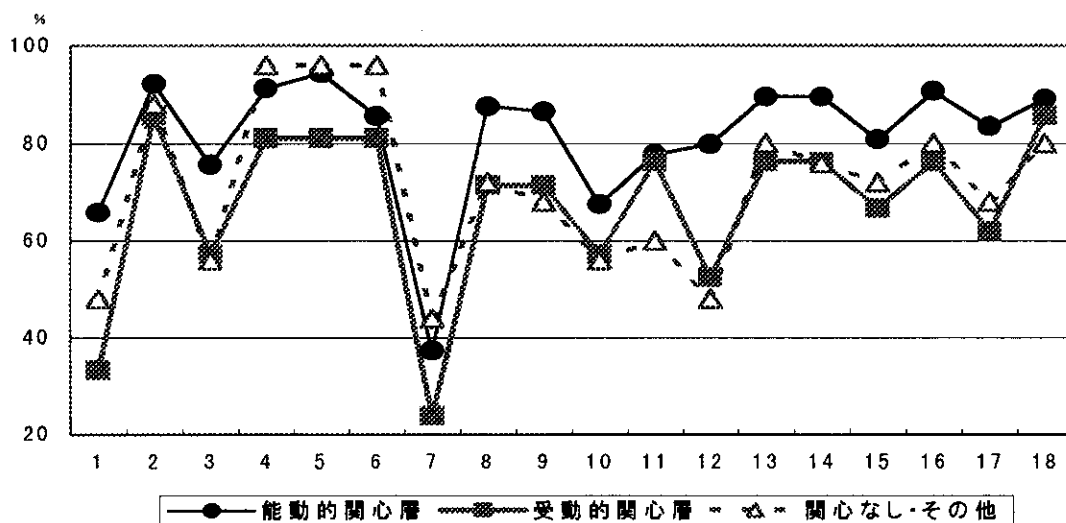
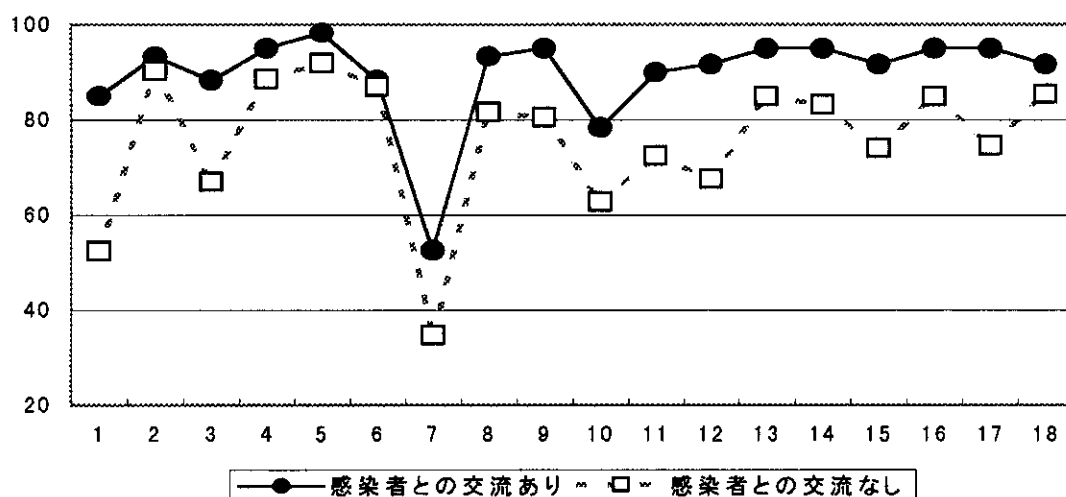


図3 感染者との交流と一般知識の正答率(9年度)



- | | |
|--------------------------|-----------------------------|
| 1 AIDSの延命治療はできない | 10 ヘルペスは性行為でうつる |
| 2 健康に見えてもHIVに感染していることがある | 11 クラミジアは性行為でうつる |
| 3 感染後2-3日でHIVに感染しているかわかる | 12 蚊や他の昆虫に刺されるとHIV感染の可能性はある |
| 4 出産時にHIV感染の可能性はある | 13 食器類からHIVにうつる可能性はある |
| 5 注射器の回し打ちはHIV感染の可能性はある | 14 プール・風呂からHIVにうつる可能性はある |
| 6 体液との接触があればHIV感染の可能性はある | 15 パスタオル・シーツからHIVにうつる可能性はある |
| 7 性病にかかっているとHIVに感染しやすい | 16 握手・抱擁からHIVにうつる可能性はある |
| 8 梅毒は性行為でうつる | 17 せき、くしゃみでHIVにうつる可能性はある |
| 9 淋病は性行為でうつる | 18 保健所では無料・匿名でAIDS検査が受けられる |

[平成 10 年度調査(中間集計)]

1. 属性

属性(年齢、居住地、場所・媒体の利用率、性的指向)については、表4に示す。

年齢別では、25歳以下が77.9%、26歳以上が22.1%であり、前年度に比べて25歳以下がほぼ倍増した。居住地は、東京都内が43%、神奈川・千葉・埼玉県が45.3%、その他が9.3%であり、前年度に比べて東京都内、神奈川・埼玉・千葉がそれぞれ1割近く増加した。場所・媒体の利用率では、映画館、サウナ、ボックスといった性的空間、パソコン通信、インターネットの利用率が増加していることが注目される。それ以外の項目に関しては、多少の変動はあるものの、大きな差は見られなかった。

性的指向については、今年度から項目を設けた。みずからを同性愛者と規定した人は約7割で、両性愛者、わからないと答えた人はそれぞれ約1割であった。

2. 一般知識の正答率

図4は、9年度と10年度の一般知識の正答率の比較を行ったものである。10年度においては、一般知識項目の一部を変更したため、昨年度の同一の項目についてのみ比較を行った。今後もこのような調査を継続していくことによってベースラインとしての意味を持たせることにより、年度ごとの変化を把握していきたいと考えている。なお、9年度との比較に関しては、10年度調査が終了した時点で行う予定であるため、今回は比較分析を行っていない。

3. エイズの情報源

図5は、9年度の10年度のエイズについての情報源の比較を行ったものである。今年度はパンフレットをさらに民間団体のパンフレットと、ゲイ団体のパンフレットにわけて質問をした。これに関しても、10年度調査が終了した時点で、比較分析を行う予定である。

4. 性行為

過去1年間の性行為の経験率を、表5に示す。今年度から、性行為については過去1年間の性行為の有無にくわえて、過去1年間の性行為における決まった性行為の相手の有無およびそのさいの性行動、その場限りの性行為の相手の有無およびそのさいの性行動について質問を行なうこととした。10年度分に関しては、中間集計であるため、過去1年間の性行為の経験率および決まった相手の有無、およびその場限りの相手の有無のみを示す。

5. リスク行為の認識

感染リスク行為としての認識における、9年度と10年度(中間集計)の比較を表5に示す。

6. 抗体検査について

抗体検査に関する質問項目は、10年度研究において新たに設けたものである。調査した項目は、①抗体検査の受検の有無、②抗体検査の受検回数、③抗体検査を受けた場所、④検査前後の相談機会の有無、⑤相談経験の有無、⑥検査時の不快経験の有無および不快だった場所、⑦検査を受けない理由、⑧検査を受けやすくする条件、等である。今回は、そのうち、抗体検査の受検割合、検査を受けた場所、相談機会の有無、相談の有無、検査を受けない理由、検査を受けやすくする条件のみを表6、7に示す。

7. STDについて

HIVをのぞくSTDに関する質問項目を、10年度研究において新たに設けたものである。調査した項目は、①STD感染の有無、②STDの罹患歴(回数、自覚症状の有無、通院経験の有無)、③STD予防についての意識、④STD検査の受検の有無、⑤STD検査への要望、である。なお、この項目については、集計中であるため、全調査終了後に分析を行う。

8. 社会的ネットワークへの参加度およびセルフエスティームについて

この項目も、10年度調査より新たに設けたものである。表8は、社会的ネットワークへの参加度を困った時に相談できるゲイの友人の有無、ゲイの友人との外出の頻度、ゲイの友人と連絡を取り合う頻度、の観点から、セルフエスティームを同性に性的興味を持つ自分は価値のある人間だと思う、同性に性的興味を持つ自分が好きである、同性に性的興味を持つ自分にはよいところがたくさんあるという質問から明らかにすることを試みている。なお、この項目は、社会的ネットワークへの参加度およびセルフエスティームと性行動、知識等の関連性を見ることを目的にしている。なお、これらの変数間の分析についても、10年度調査が終了後に行う予定である。

D 考察

10年度の調査が現在継続中であるため、考察においては9年度調査の最終報告のみを行う。

今回の結果より、男性同性愛者のHIV/エイズについての一般知識の正答率では、性感染症(STD)につ

いての知識が十分に伝達されていないことが明らかになった。とりわけ、STD 感染とHIV感染との関連を問う項目に関しては、全体の正答率は約 4 割と、他の項目よりもかなり低い正答率であった。

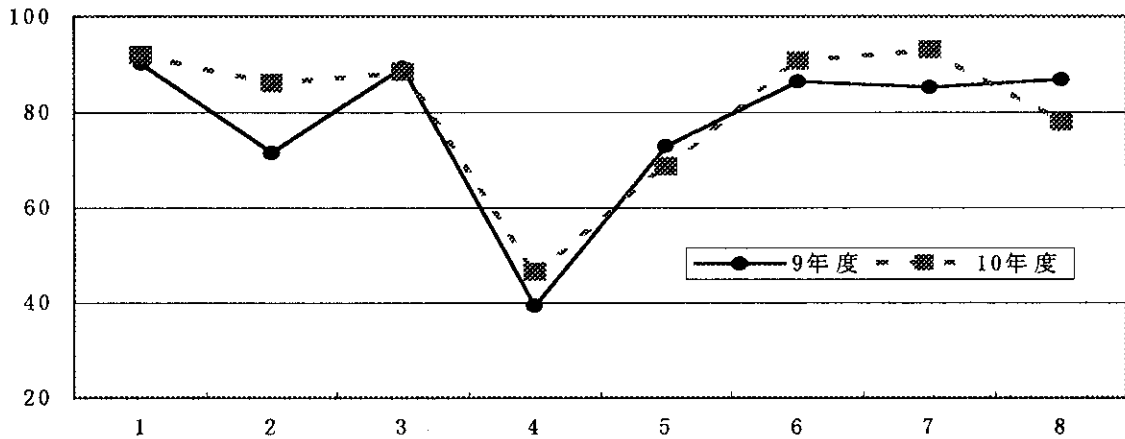
性的空間の利用の頻度とHIV／エイズについての知識および性行為に関しては、関連性がみられないという結果が示された。この結果は、性的空間利用者が性的空間非利用者と比較して、HIV感染の可能性の高い性行為をしているとは言えないことを示している。

コンドームを携帯しているも、コンドーム使用についての意思を相手に伝達することの困難さがあることも、本調査で明らかになった点のひとつである。今後の、予防啓発活動においては、性行為の場面において、セーフアセックスの意思を伝えるコミュニケーション能力の涵

養が重要となってくるであろう。

HIV への関心の程度が能動的であるか、受動的であるか、無関心であるかによっても、一般知識の正答率、感染リスク行為の認識、リスク行動において有意な差が見られることが明らかになった。今後の課題は、いかにHIV への関心を高めていかにあるといえる。その点で言えば、HIV 感染者との交流が、HIV／エイズについての正確な知識の取得、性行動、そしてエイズへの関心の高さとの間に相関関係がみられたことは、意義深い。それは、HIV 感染をオープンにできる社会環境をつくっていくこと——共生をすすめていくこと——が、感染者だけでなく、非感染者にとっても、重要であることを示しているからである。

図4 一般知識の正答率(10年度)



- 1 健康に見えてもHIVに感染していることがある、
- 2 感染後2-3日でHIVに感染しているかわかる
- 3 出産時にHIV感染の可能性はある、
- 4 性病にかかっているとHIVに感染しやすい
- 5 蚊や他の昆虫に刺されるとHIV感染の可能性はある、
- 6 食器類からHIV感染の可能性はある
- 7 プール・風呂からHIV感染の可能性はある、
- 8 保健所では無料・匿名でエイズ検査ができる

図5 エイズの情報源(10年度)

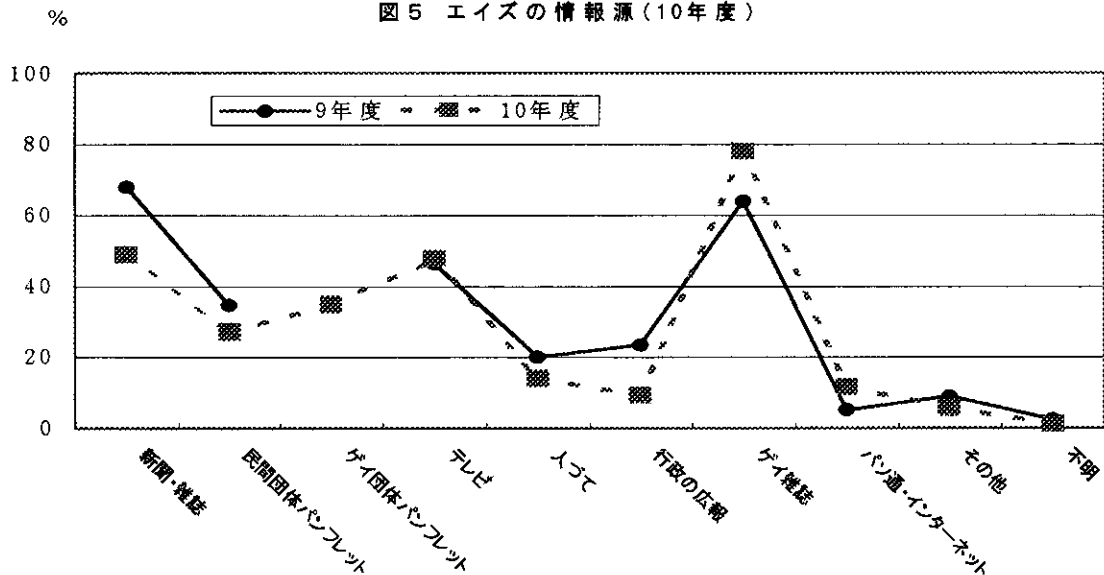


表4 属性(年齢、居住地、場所・情報の利用、性的指向)

	9年度 (n=255) n(%)	10年度 (n=86) n(%)
年齢		
25以下	101(39.6)	67(77.9)
26以上	133(52.2)	19(22.1)
不明	21(8.2)	0(0)
居住地		
東京	70(31)	37(43)
神奈川・千葉・埼玉	84(36.5)	39(45.3)
その他	80(32.5)	8(9.3)
不明	21(8.2)	2(2.3)
場所・媒体の利用率		
グッズショップ	170(66.4)	55(64)
ゲイバー	123(49.8)	44(51.2)
ゲイ映画館	20(7.9)	8(9.3)
サウナ	31(12.2)	15(17.4)
ボックス	66(25.9)	28(32.6)
ハッテン公園	22(8.7)	7(8.1)
ディスコ・クラブ	54(21.2)	23(26.7)
伝言ダイヤル・Q2	43(16.8)	14(16.3)
L/G映画祭	26(10.2)	12(14)
ハッテン・トイレ	14(5.5)	3(3.5)
パソコン通信・インターネット	58(22.7)	34(39.5)
文通欄	78(30.6)	26(30.2)
サークル・イベント	85(33.4)	23(26.7)
ゲイ向け電話相談	6(2.4)	4(4.7)
売り専	8(3.1)	2(2.3)
性的指向		
同性愛者		63(73.3)
両性愛者		9(10.5)
異性愛者		0(0)
わからない		10(11.6)
その他		0(0)
不明		4(4.7)

表5 性行為および感染リスク行為の認識

	9年度 (n=255)	10年度 (n=86)
性行為の経験率	181(71)	57(66.3)
決まった相手がいた割合		20(35.1)
その場限りの相手がいた割合		47(82.5)
感染リスク行為としての認識		
軽いキス	8(3.1)	1(1.2)
ディープキス	51(20)	15(17.4)
口内射精	220(86.3)	78(90.7)
コンドームなしのフェラチオ	111(43.5)	49(57)
肛門内射精	231(90.6)	79(91.9)

表6 抗体検査について

n=86

	n	%		n	%
抗体検査を受けたことがある	31	36.0	抗体検査を受けたことがない	47	54.7
検査を受けた場所(MA)			抗体検査を受けない理由		
保健所	15	48.4	関心なし	5	10.6
病院	7	22.6	こわい	12	25.5
南新宿	11	35.5	場所不明	10	21.3
夜間・休日相談所	3	9.7	面倒	11	23.4
海外	0	0	なんとなく	19	40.4
その他	1	3.2	セックスなし	14	29.8
不明	0	0	感染しているから	0	0
相談の機会の有無(MA)			感染少ないから	0	0
検査前	16	51.6	その他	2	4.3
検査後	13	41.9			
なし	6	19.4			
不明	2	6.5			
相談の有無					
はい	22	71.0			
いいえ	7	22.6			
不明	2	6.5			

表7 検査を受けやすくする条件(MA)

	n	%		n	%
夕方・夜間	26	30.2	自宅から近い	6	7.0
休日	20	23.3	自宅から遠い	1	1.2
予約なし	7	8.1	その他	2	2.3
プライバシー	33	38.4	不明	30	34.9
安い	9	10.5			

表8 社会的ネットワークへの参与度・セルフエスティーム

	n	%
社会的ネットワークへの参与度 (yes回答率)		
相談できる友人の有無	51	59.3
友人との外出	47	54.7
友人との連絡	58	67.4
セルフエスティーム (yes回答率)		
価値ある人間と思う	67	77.9
自分が好きである	62	72.1
よいところがたくさんある	64	74.4
自分に自信がない	31	36.0
負担を感じる	40	46.5
自分らしくいられる	61	70.9
積極的に助けたい	77	89.5
リラックスできる	72	83.7
ストレスを感じる	69	80.2

日本人ゲイ男性の生育歴とセルフ・エスティームおよび性行動に関する研究

日高 庸晴(筑波大学大学院)

市川 誠一(神奈川県立衛生短期大学)

木原 正博(神奈川県立がんセンター)

研究要旨

本研究では HIV/AIDS 対策を行う上で有益な基礎データとなりうる、ゲイ男性の性行動の実態とセルフ・エスティーム(自己価値感、自尊心)や生育歴(いじめられた経験や自殺企図、性的虐待による性被害)および日常生活におけるサポート・ネットワークに関して質問紙調査を行い、これらの一側面が明らかとなった。

Tukey の多重比較の結果、セルフ・エスティームの低位群と高位群には HIV/AIDS に関する知識の差に有意傾向がみられた($MSe=96.192$, $p<0.1$)。また、セルフ・エスティームと職場(学校)でのサポート・ネットワーク($\rho = .352$, $p<0.05$)、セルフ・エスティームとゲイの交友関係でのサポートネットワーク($\rho = .316$, $p<0.05$)がそれぞれ有意に相関していた。

性行動別コンドーム不使用状況に関しては、オーラルセックス・アナルセックスともに、コンドームを使用しない傾向は年齢と有意に相関していた。オーラルセックスでは「フェラチオする側」「フェラチオされる側」ともにコンドームを使用しないことが有意に相関していた($\rho = .888$, $p<0.01$)。また、アナルセックスに関しても、「アナルに挿入する側」「アナルに挿入される側」ともにコンドームを使用しないことが有意に相関していた($\rho = .714$, $p<0.01$)。

HIV 抗体検査システムに関しては、全体の 56.1%が「献血がエイズ検査の機能を果たせば良い」と考え、そのうち 46%は「ゲイの医者やカウンセラーが対応してくれれば検査を受けやすい」と答え、29%は「ゲイ専用の検査室が欲しい」と答えている。このことから、ゲイ男性が HIV 抗体検査受検行動を促進するための環境整備が緊急に必要であるとの示唆を得た。

これらのことから、HIV 感染予防のみならず STD の知識および感染予防のメッセージが、より若年時に必要であることが明らかとなった。また、ゲイ男性のセルフ・エスティームを高め、サポート・ネットワーク構築のためのスキル・アップ・トレーニングなどの介入プログラムの開発、およびゲイ男性にとって有益な HIV/AIDS の情報伝達やそのための環境整備が急務であると言える。

A. 研究目的

ゲイ男性への効果的な HIV/AIDS 予防啓発を行っていく上で、性行動の正確な実態把握は不可欠であり、近年それらの調査研究が少なからず行われている。同時に、HIV 感染リスクのある性行動はセルフ・エスティーム(自己価値感、自尊心)の低さや精神疾患が関係している(1)と考えられるため、性行動のみに焦点をあてた調査研究のみでは不十分であり、サポート・ネットワークとセルフ・エスティームとの関係や、生育歴におけるトラウマなどとの関連を明らかにする必要がある。

よってセクシュアル・マイノリティであり、社会的に脆弱な存在とされるゲイ男性の精神的健康や、ストレスなどの心理・社会的背景と性行動との関連を明らかにすることが急務と考えられる。またそれらを考慮した上で HIV/AIDS 予防啓発を行っていくことがより重要である。しかし、本邦においてゲイ男性の生育歴や心理・社会

的側面に焦点をあてた調査研究はほとんど実施されていない。

HIV/AIDS および STD 感染予防啓発が緊急かつ恒常的に必要とされるゲイ男性に対するより効果的かつ、ゲイ男性の生育歴および性行動の実態に即した予防啓発プログラムを開発するために、ゲイ男性の心理・社会的背景を明らかにすることが重要である。よって本研究の目的は、ゲイ男性の性行動に関する実態と、セルフ・エスティームや生育歴などの心理・社会的背景を明らかにすると共に、性行動との関連を検証することとする。また本研究は、次年度実施予定である本調査のためのパイロット・スタディと位置づけられる。

B. 研究方法

性行動やセルフ・エスティーム、生育歴などゲイ男性の日常生活に関する質問項目を、包括的に網羅した質

問紙を10代後半から30代のゲイ男性(主に大学生)を中心に機縁法により配布・回収した(配布数44部、回収数および有効回収数41部、有効回収率93%)。無記名自記式質問紙法を採用し、調査者もしくはキー・インフォーマントの面前における自記式および配票留置により質問紙回答を得た。同時に、5名には質問紙に基づく半構造化面接を実施した。

質問紙作成における重要な視角として、セクサーセックスの障害要因が心理・社会的背景に関係しているとした。質問紙構成内容は、①基本属性、②生育歴(いじめられた経験や自殺企図および性的虐待による性被害の有無など)、③HIV/AIDSに関する知識、④自己価値感尺度、⑤情緒的支援ネットワーク尺度、⑥カミングアウトに関する意識と態度、⑦HIV抗体検査システムに関する意識、⑧性行動《相手と、行動別のコンドーム使用に関して》、⑨ハッテン場へ行く目的とその頻度などから構成され、総質問項目数は228問であった。なお、質問紙作成にあたっては20代のゲイ男性にインタビュー調査を実施した上で、質問項目を検討した。そのため、ゲイ男性の日常生活の現状を汲み取り、それが反映された形で妥当性のある質問内容を構成し得たと言える(表1参照)。

また、各尺度の信頼性係数 α は概ね高い値を示し尺度の信頼性も確保されたと言えよう。

表1

質問紙構成内容

- ①基本属性
- ②生育歴(いじめられた経験や自殺企図および性的虐待による性被害の有無)
- ③HIV/AIDSに関する知識
- ④自己価値感尺度(セルフ・エスティーム)
- ⑤情緒的支援ネットワーク尺度(家族、職場、カムアウトしている友達、ゲイのそれぞれからのサポート・ネットワークに関して)
- ⑥カミングアウトに関する意識と態度
- ⑦HIV抗体検査システムに関する意識
- ⑧性行動《主にセックスの相手別、行動別のコンドーム使用状況に関して》
- ⑨ハッテン場に関して

C. 結果

調査対象者(N=41)の年齢分布は15歳～19歳が9.8%、20歳～24歳が41.5%、25歳～29歳が34.1%、30歳～34歳が14.6%であり、調査対象者はHIV感染が拡大している若年および青年層とほぼ一致している

(表2参照)。

居住地は、茨城県36.6%、東京都31.7%、神奈川県9.8%、埼玉県7.3%、千葉県4.9%、栃木県2.4%、宮城県2.4%、岐阜県2.4%、福井県2.4%であった。

学歴は、大学院在学中/卒が19.5%、大学在学中/卒が56.1%、専門学校在学中/卒が19.5%、高校卒が4.9%である(表3参照)。

従って、本研究における調査対象者は、北関東地方在住の比較的高学歴な若年・青年層と特徴づけられる。職業は学生が51.2%、会社員・公務員・団体職員が39.0%、フリーター・契約社員が9.8%であった。本研究は次年度実施予定の本調査における質問紙の咀嚼・検討の意図もあり、目的に合致した集団を調査対象とした。また、総質問項目数228問に対して、平均回答時間は21.6分であった。

表2

調査対象者の年齢分布	
15歳～19歳	9.8% (4人)
20歳～24歳	41.5% (17人)
25歳～29歳	34.1% (14人)
30歳～34歳	14.6% (6人)

表3

学歴	
大学院在学中/卒	19.5% (8人)
大学在学中/卒	56.1% (23人)
専門学校在学中/卒	19.5% (8人)
高校卒	4.9% (2人)

性的指向に関する性自認は、自らを「男性同性愛者」と回答した者が77.5%、「両性愛者」15.0%、「判らない、決めたくない」と回答した者は7.5%であった。また、セックスしたい相手の性別を問う項目では、「男性のみ」が55.0%、「主に男性」が27.5%、「両方」が15.0%、「判らない」が2.5%であり、また95.0%が実際に男性とセックスの経験があった。なお、自らの性的指向をゲイであると「何となく」自覚した平均年齢は13.8歳であり、「はっきりと」自覚した平均年齢は17.0歳であった。

生育歴①いじめ

生育歴に関して「これまでにホモ、おかま、おとこおんな、などの言葉がいじめの現場で使われていることを目撃したことはありますか」という質問項目を設定したところ、68.3%が「たびたびあった」「たまにあった」と答えている。さらに自分自身が過去にいじめを受けた者のうち、

48.2%がこれらの言葉でいじめられた経験があった。また、いじめを受けた者の 20.6%は自らの性的指向がいじめの原因になったと認知していることが明らかになった。

生育歴②自殺企図

ゲイやレズビアン、バイセクシュアルの若者の自殺リスク・ファクターには、低いセルフ・エスティームや社会的孤立、抑鬱、ネガティブな家族との相互関係や社会のネガティブな態度が含まれて(2)いると考えられる。そのため、セクシュアリティに起因するいじめと並んで自殺企図に関してもゲイ男性の生育歴における危機として、深刻な問題と捉えざるをえない。

「これまでに自殺を考えたことがありますか」という質問項目に対して、57.5%がこれまでに自殺を考えたことがあると答えている。そのうち 15.0%は6回以上の自殺企図があり、初めての自殺企図の平均年齢は 15.5 歳であった。この年齢は、米国のレズビアン・ゲイ・バイセクシュアルの若者の自殺未遂平均年齢(3)とほぼ一致している。

ゲイ男性の多くは、自らのセクシュアリティの揺らぎやセクシュアル・アイデンティティを確立することが出来ない学齢期に、これらに起因したスティグマを付与されることが多い。学校教育現場におけるいじめや、自殺企図などがそれらの背景の一側面であろう。よって、ゲイ男性の心理的葛藤や苦悩は数多く、セルフ・エスティームの維持と向上も困難となるであろう。そうした苦悩と葛藤を経験する中で、ゲイ男性は、自分以外のゲイ男性に初めて出逢うこととなる。自分以外のゲイ男性に初めて出逢った時の平均年齢は、19.0 歳であった。その際の出逢いの手段は、ゲイ雑誌の文通欄を利用した回送が最も多く、ハッテン場やゲイ・バーなどゲイ・メディアやゲイ・コミュニティでの出逢いが多数を占めた。

表 4

生育歴におけるライフ・イベント	平均年齢
ゲイであると「何となく」自覚	13.8 歳
ゲイであると「はっきりと」自覚	17.0 歳
自殺企図平均年齢	15.5 歳
初めてゲイに会った平均年齢	19.0 歳

HIV/AIDS に関する知識

HIV/AIDS に関する一般的な情報と知識について 12 項目 3 件法の質問項目を設定した。

全体の 24.4%がハッテン場は HIV に感染する可能性

が高いと答え、これまでにハッテン場を利用したことがある者のうち 67.8%も同様の回答を示した。また、STD に罹患していると HIV に感染しやすくなるという知識が全体の 73.2%に浸透しておらず、HIV 感染予防に関する大まかな知識の浸透はみられるものの、STD 感染予防メッセージが不足していることが示唆された。

表 5

HIV/AIDS に関する知識(正答率)	N=41
健康に見えても HIV (エイズウイルス)に感染していることがある	97.6%
通常の HIV 検査では、感染後 2~3 日で感染しているか判る	85.4%
ハッテン場ではエイズに感染する危険性が高い	24.4%
性病にかかっていると HIV に感染しやすい	26.8%
蚊や虫に刺されると HIV に感染する可能性がある	90.2%
HIV は食器類からもうつる可能性がある	97.6%
友達や特定の恋人などから HIV に感染することは少ない	73.2%
フェラチオをされる側は、HIV に感染しない	17.1%
アナルセックスの際、挿入する側ならば感染しない	92.7%
コンドームを 2 枚重ねにすると HIV の予防効果が高くなる	39.0%
コンドームには使用期限がある	90.2%
コンドームを携帯する際、財布の中に保管するのが便利だ	61.0%

セルフ・エスティーム

Rosenberg の自己価値感尺度(宗像訳;10 項目 3 件法、信頼性係数 $\alpha = .836$)を用いて、セルフ・エスティームを測定することを試みた。この尺度は、「だいたいにおいて自分に満足している」「少なくとも他人と同じくらいの価値はある人間だと思う」などの項目や、逆転項目を含めて 10 項目で構成されており、回答は 3 件法とされている。平均得点は 10 点満点で 6.0 点(SD = 2.95)であった。しかし、得点分布をみるとセルフ・エスティームの高位群と低位群とに比較的大きく分かれた。そのため、セルフ・エスティーム得点の高さで三群に分け、HIV/AIDS に関する知識得点(12 点満点)とを一元配置の分散分析で処理した。その結果、セルフ・エスティーム得点の高さによって知識得点の差に有意傾向がみられた [(F2,38)=2.708, $p < 0.1$]。さらに Tukey の多重比較を行った結果、セルフ・エスティーム低位群と高位群の間に

は知識得点の差に有意傾向がみられた(MSe=96.192, $p<0.1$)。

サポート・ネットワーク

ゲイ男性が日常生活において、どのようなサポート・ネットワークを獲得し、維持しているか測定するために、宗像(4)の情緒的支援ネットワーク尺度を用いた。選択肢は調査対象者の実態を的確に把握するために改変した上で使用した。この尺度は、「会うと心が落ち着き安心できる人」「あなたを評価し、認めてくれる人」などが、家族や職場などそれぞれの環境において存在しているかどうか、その存在を自ら認知しているかを問う尺度である。「家族からのサポート(信頼性係数 $\alpha = .844$)」「職場(学校)からのサポート(信頼性係数 $\alpha = .850$)」「カミングアウトしている友達からのサポート(信頼性係数 $\alpha = .905$)」「ゲイの交友関係からのサポート(信頼性係数 $\alpha = .868$)」のそれぞれに関して、10項目3件法で測定した。さらにサポート・ネットワークとセルフ・エスティームの関連を検証した。

相関分析の結果、セルフ・エスティームと「職場(学校)からのサポート」が有意に相関しており($\rho = .352$, $p<0.05$)、同時にセルフ・エスティームは「ゲイの交友関係からのサポート」と有意に相関していた($\rho = .316$, $p<0.05$)。また、「職場(学校)からのサポート」と「家族からのサポート」($\rho = .491$, $p<0.01$)、「カミングアウトしている友達からのサポート」と「ゲイの交友関係からのサポート」($\rho = .486$, $p<0.01$)もそれぞれ有意に相関していた。また、HIV/AIDSに関する知識得点との関連では、「ゲイの交友関係からのサポート」が有意に相関していた($\rho = .427$, $p<0.01$)。

カミングアウトに関する意識と態度

多くのゲイ男性は、思春期・青年期に性的指向に対する戸惑いを覚えるばかりでなく、いじめられた経験や自殺企図、さらには性的虐待などの困難な生育歴を辿ることが多い。社会からの差別・偏見や社会的抑圧、自らの性的指向を肯定的に受容出来ないことなどに起因する同性愛嫌悪を内包化してしまうことがある。それによって、性的指向を周囲にカミングアウトすることは容易ではなく、内包化された同性愛嫌悪はカミングアウト阻害要因であるばかりではなく、精神的健康の維持・向上を困難にさせる要因でもあったと考えられる。しかし一方で、カミングアウトは自らの性的指向を肯定的に捉え、受容し、個人の自己決定によって選択的になされる行為であるとも考えられる。そこで、カミングアウトの意識と態度が

HIV/AIDSの知識やセルフ・エスティームとどのような関連があるかを検証するために、10項目5件法の質問項目を設定し、測定した。相関分析の結果、カミングアウトに対してポジティブ考え方と態度であれば、HIV/AIDSに関する知識得点も高い傾向にあることが判った($\rho = .354$, $p<0.05$)。しかし、セルフ・エスティームとの関連はみられなかった。

表6「大いにそう思う」「そう思う」人の割合(N数)

カミングアウトに関する意識と態度	
信頼出来る友達や知人ならば話してもいいと思う	66.9% (25/41)
カミングアウトすることによって、自分に不利益があると思う	51.2% (21/41)
親には出来ることなら話さないで済ませたい	65.9% (27/41)
カミングアウトそのものの必要性を感じない	31.7% (13/41)
相手が誰であっても自分がゲイであることをオープンにしたいと思う	17.1% (7/41)
プライベートな友達などにはカミングアウトしてもいいと思うが、現在の学校や職場では絶対に出来ない	56.1% (23/41)
現在の学校や職場でカミングアウトしたら、人間関係が崩壊するかもしれない	48.8% (20/41)
自分にはカミングアウトしても今までと変わらずに付き合っていける友達がいる	65.9% (27/41)

生育歴③性的虐待

生育歴における性的虐待(性的ないやがらせ、いたずら)に関して質問紙による回答は2名、半構造化面接で明らかになった1名の計3名であった。虐待行為を行った abuser の全てが男性、すなわち同性であり、なかには血縁関係にある父親から入院治療が必要なほどにまで、身体的精神的苦痛を伴う虐待を継続的に受けていたケースもあった。このことは学齢期において性的虐待を受けつつも、誰にも相談することが出来ず、悩み苦悩しているゲイ男性が実際に存在していることを示しており、看過してはならないことである。性的虐待の被害経験がセックスへのネガティブなイメージ形成につながることや、セイファーセックス実行に悪影響を与えることも考えられる。本邦においては、ゲイ男性もしくは性被害を受けた男性・男児が相談や救済を求めて利用出来る

相談機関などはほとんど存在しない。今後は、可視化されていないが実際には日常的に起こっているゲイ男性の性被害の実態把握を進めると同時に、社会資源の整備を進める必要もあるだろう。

ケース①

9歳の時に性的虐待を初めて受け、同性の親類から4～5回に渡って性的虐待を受けた。被害を受けた当時、誰にも話さなかった。現在のセルフ・エスティーム得点は10点満点で10点、HIV/AIDSに関する知識得点は12点満点で6点であった。サポート・ネットワーク得点は、20点満点で家族からは20点、職場からは11点、カミングアウトしている友達からは20点、ゲイの交友関係からは20点であった。

ケース②

17歳の時に学校の先輩から性的虐待を受けた。継続した性的虐待はなく、その1度だけであった。被害を受けた当時、同性の知人と異性の知人、友達に性的虐待の事実を話している。現在のセルフ・エスティーム得点は10点満点で10点、HIV/AIDSに関する知識得点は12点満点で7点であった。サポート・ネットワーク得点は、20点満点で家族からは20点、職場からは19点、カミングアウトしている友達からは19点、ゲイの交友関係からは18点であった。

なお、性被害経験が自らの人生に「少し悪い影響を与えた」と認識していた。

ケース③

小学生の時に父親から継続した性的虐待を受け、入院治療を必要とした。被害を受けた時も現在も誰にも話したことはなく、被害を受けたことは「思い出したくない」ことである。被害の後に両親とりわけ父親から「性は汚らわしいもの」という性規範を、強固に植え付けられたと認知している。現在のセルフ・エスティーム得点は10点満点で10点、HIV/AIDSに関する知識得点は12点満点で9点であった。サポート・ネットワーク得点は、20点満点で家族からは0点、職場からは9点、カミングアウトしている友達からは0点、ゲイの交友関係からは4点であった。

HIV抗体検査システムに関する意識

実際のHIV抗体検査受検行動の有無や感染不安などの背景に関わらず、ゲイ男性にとってどのような検査システムが有効であるか、具体的にどのようなニーズが

あるのかを明らかにすることを目的として、HIV抗体検査システムに関する10項目5件法の質問項目を設定した。質問紙作成のためのパイロット調査や半構造化面接において、ゲイ男性がHIV抗体検査を受検する際に、自らのセクシュアリティを明らかにすることは困難であるということが判った。そのため、検査前後のカウンセリングやガイダンス時においても異性間性的接触の者を対象とした予防メッセージを受けとることが多く、ゲイ男性にとって有益な情報となりえていないと予測出来る。同性間性的接触によるHIV感染者の中に、複数回の受検の結果陽転しているケースの割合が高くなっている現在、検査前後のカウンセリングは予防的介入として、効果が高いであろう。

そうした視角から、「ゲイ男性にとって」はどのようなHIV抗体検査システムの整備が必要であるかという点に配慮し、質問項目を構成した。

その結果、過去1年以内にHIV抗体検査を受けた者は8人であり、受検率は19.5%であった。全体の80%以上の者が「夜間や土日に検査を受けられるシステム」を望んでおり、「ゲイの医者やカウンセラーが対応してくれれば検査を受けやすい」と78%が望んでいることが明らかとなった。全体の56.1%が「献血がエイズ検査の機能を果たせば良い」と考え、そのうち46%(N=19)は「ゲイの医者やカウンセラーが対応してくれれば検査を受けやすい」と答え、29%(N=12)は「ゲイ専用の検査室が欲しい」と答えている。また、過去1年以内に受検した者のうち25%(N=2)は「献血がエイズ検査の機能を果たせば良い」と考えていた。

表7

過去1年以内のHIV抗体検査受検率 (N)	
受検あり	19.5% (8/41)
受けようと思ったことはあるが、まだ受けていない	53.7% (22/41)
受検なし	26.8% (11/41)

表 8

「大いにそう思う」「そう思う」人の割合 (N)	
HIV 抗体検査システムに関して	
夜間も検査を受けられるシステムが良い	87.8% (36/41)
土日も検査を受けられるシステムが良い	97.5% (40/41)
ゲイの医者やカウンセラーが対応してくれれば検査を受けやすい	78% (32/41)
検査結果を郵送で知らせてくれるシステムが良い	56.1% (23/41)
検査前と検査後にしっかりとカウンセリングをして欲しい	73.1% (30/41)
ゲイ専用の検査室が欲しい	39.1% (16/41)
献血がエイズ検査の機能を果たせば良い	56.1% (23/41)
エイズが完治できる病気になれば検査を受けようと思う	31.8% (13/41)

性行動

性行動別におけるコンドーム不使用状況を分析したところ、スピアマンの相関係数は各行動間において有意に正の相関を示していた。また、オーラルセックス・アナルセックスともに、コンドームを使用しない傾向は年齢と有意に相関していることが認められた。

オーラルセックスでは「フェラチオする側」「フェラチオされる側」ともにコンドームを使用しないことが有意に相関していた($\rho = .888, p < 0.01$)。また、アナルセックスに関しても、「アナルに挿入する側」「アナルに挿入される側」ともにコンドームを使用しないことが有意に相関していた($\rho = .714, p < 0.01$)。同様に「フェラチオする側」と「アナルに挿入する側」($\rho = .588, p < 0.01$)、「フェラチオされる側」と「アナルに挿入される側」($\rho = .400, p < 0.01$)、「フェラチオする側」と「アナルに挿入される側」においてもコンドーム不使用に関して有意に相関($\rho = .471, p < 0.01$)していた(表 10・表 11 参照)。

表9 セックスをしている時の STD/HIV 感染不安の有無

STD/HIV の感染不安	Self-Esteem 低群		Self-Esteem 中群		Self-Esteem 高群	
	不安有	不安無	不安有	不安無	不安有	不安無
恋人とセックスしている時	5	5	5	4	9	7
友達とセックスしている時	4	4	3	2	10	5
ハッテン場でセックスしている時	4	1	4	0	12	2
それ以外の相手とセックスしている時	4	2	2	2	8	3

表 10 相手および行動別のコンドーム使用状況

コンドーム使用状況 ○=使用 ×=不使用	○		×		○		×	
	○	×	○	×	○	×	○	×
恋人にフェラチオされる時	2	8	1	9	1	15		
友達に	1	6		7	2	12		
ハッテン場で	1	3	1	4	3	11		
それ以外の相手に	1	4		3	3	7		
恋人にフェラチオする時	1	9		10	2	13		
友達に	1	6		7	2	11		
ハッテン場で	2	2	1	3	2	10		
それ以外の相手に	1	4		3	2	8		
恋人とのアナルセックス(挿入される時)	4	1	4	2	7	5		
友達に	3	1	3	2	8			
ハッテン場で	3		2	1	6			
それ以外で	3		2		6			
恋人とのアナルセックス(挿入する時)	3	1	4	3	6	4		
友達に	3	1	3	1	7	1		
ハッテン場で	1		2		7			
それ以外	1		1		6			

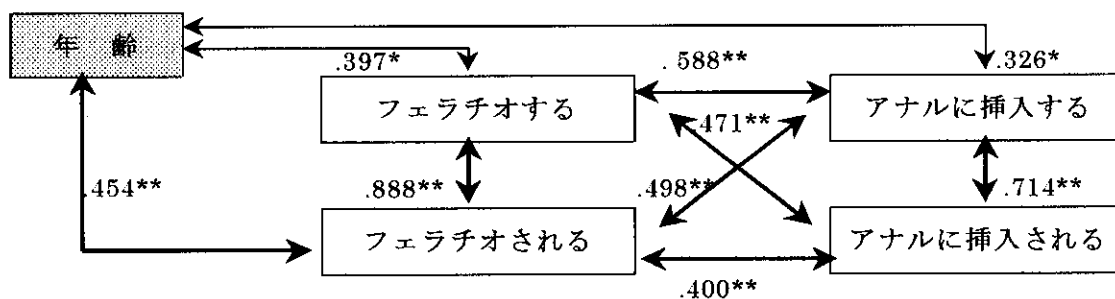


表 11 性行動別コンドーム不使用状況の相関図

相関関係 * p < 0.05 ** p < 0.01

ハッテン場に関して

ハッテン場は主にセックスを目的とする者が多く集まると認識されがちだが、ハッテン場へ行く者の心理・社会的背景を考慮した上で、調査研究および啓発活動を実施する必要があると考えられる。何故なら、何を求めてハッテン場に訪れているのか、利用者のニーズを把握しないことには現実に即した予防的介入を果たすことが出来ないからである。そこで本研究では、ハッテン場の利用目的(役割と機能)を複数回答によって明らかにすることを試みた。ハッテン場に行った経験のある者は全体の 70.7%であり、そのうち 39.0%は現在もハッテン場を利用していると答えている。またハッテン場利用目的(役割と機能)として回答者の多かった順に、セックス(17人)、②友達・恋人を探すこと(15人)、③その時の寂しさをうめること(13人)、④現実社会からの逃避(7人)、⑤ただなんとなく(5人)、⑥日頃のストレス解消(5人)、⑦人がセックスしているところを見るため(2人)、などがあつた。

また、ハッテン場へ行ったあとにどのような気持ちになるかという項目では、①セックスが出来て満足した(26人)、②その時の寂しさが紛れた(11人)、③友達や恋人が出来て満足した(8人)、④後悔(6人)、⑤エイズや性感染症(STD)が心配になった(6人)、⑥楽しくて仕方ない(5人)、⑦その他(2人)、という結果を得た。このことから、ゲイ男性はハッテン場においてセックスによる満足感を得つつも、単にセックスだけを求めてハッテン場に集まるのではなく、個々にその理由やニ

ズは様々であることが明らかとなった。

このことから、ハッテン場利用者の心理・社会的背景にも配慮した HIV/AIDS 予防啓発が必要であると言える。

D. 考察

ゲイ男性の生育歴の中で、いじめられた経験や自殺企図、性的虐待などにより、思春期・青年期のゲイ男性が深刻な状況におかれていることが本研究によって示唆された。ゲイ男性への差別的言語である「ホモ、おかま、おとこおんな」などの言葉によるいじめ体験は、思春期・青年期において肯定的なセクシュアリティを形成する上で大きな障害となり、セクシュアル・アイデンティティ確立における阻害要因になるばかりでなく、セルフ・エスティームの低下要因となるであろう。一方で、高いセルフ・エスティームはセーフターセックス実行と関係しており、HIV 感染予防にもつながる(5)。このことから、ゲイ男性が肯定的なセクシュアリティ観を形成し、自らの性的指向を肯定的に捉えることが出来るような性教育・保健科教育の実施が急務であると思われる。

また、セルフ・エスティームによって HIV/AIDS に関する知識の差に有意傾向がみられ、同時にサポート・ネットワークとも有意に相関していた。このことから、ゲイ男性のセルフ・エスティームを高め、サポート・ネットワーク構築のためのトレーニングなど介入プログラムを開発することも必要であると言える。

HIV 検査システムに関しては、全体の半数以

上が「献血がエイズ検査の機能を果たせば良い」と考え、そのうち 46%は「ゲイの医者やカウンセラーが対応してくれれば検査を受けやすい」と答え、29%は「ゲイ専用の検査室が欲しい」と答えている。また、過去1年間に HIV 抗体検査受検経験のある者のうち、25%が「献血が検査機能を果たせば良い」と認識していた。しかしこれは、献血を検査目的に利用していることを意味していない。これらのことから、HIV 抗体検査システムが献血と同程度に手軽に利用出来ることを望んでいるのか、それとも現行の検査システム自体に問題があるのか、この点に関して明らかにする必要があるだろう。以上のことから、ゲイ男性が HIV 抗体検査を受検する上での必要要件をさらに明らかにするとともに、受検行動を阻害する要因を排除し、ゲイ男性が受検行動を促進させることが出来る環境整備が緊急の課題であろう。

また、年齢とコンドームを使用しない性行動には有意な相関がみられたことから、知識普及はもとより、初めての性体験時や、より若年時にセーフターセックスのスキル・トレーニングを実施することや、HIV/AIDS および STD 感染予防メッセージなど、ゲイ男性にとって有益な情報を的確に広く浸透させていく必要がある。そのための環境整備も必要であるとの示唆を得た。また、若年時におけるコンドーム使用やセーフターセックスの実行は、その後のコンドーム使用に対する動機づ

けになると推察することが出来る。年齢が上昇するにつれてコンドームを使用しない傾向にあることから、コンドームを使用しなくなる理由やコンドーム不使用への転換理由などに関して明らかにすることも、今後の研究課題であろう。

今後は、生育歴やサポート・ネットワーク、さらにはセルフ・エスティームやメンタルヘルスなど、ゲイ男性の心理・社会的背景と性行動との関連を明らかにするサンプルサイズを拡大した調査研究が必要であろう。

E. 引用文献

- (1)Stokes JP, Peterson JL.(1998). Homophobia, self-esteem, and risk for HIV among African American men who have sex with men. *AIDS Educ Prev*, 10(3):278-92
- (2)Curtis D, Proctor and Victor K. Groze.(1994). Risk factors for suicide among gay, lesbian and bisexual youths. *Social Work*, 39(5):504-514
- (3)Remafedi,G.,Farrow,J.A.,& Deisher, R.W.(1991).Risk factor for attempted suicide in gay and bisexual youth. *Pediatrics*, 87,869-875
- (4) 宗像恒次.(1996).最新 行動科学からみた健康と病気.メヂカルフレンド社
- (5) Cole FL.(1997). The role of self-esteem in safer sexual practices. *J Assoc Nurses AIDS Care*, 8(6):64-70

MSM1グループ

アメリカ主要都市に在住する日本人男性同性愛者の性行動調査

鬼塚直樹 (Center for AIDS Prevention Studies – CAPS, University of California, San Francisco)
市川誠一、大屋日登美 (神奈川県立衛生短期大学)、木原正博 (神奈川県立がんセンター)

研究要旨

アメリカ主要都市に在住する日本人男性同性愛者の性行動の実態を把握するために、質問票による調査を行った。これはサンフランシスコ、ロサンゼルス、ニューヨークというアメリカにおいてもHIV感染が大きな健康及び社会問題となった都市に、人種的マイノリティーまたセクシャル・マイノリティーとして在住する日本人男性同性愛者の性生活の実態を把握することによって、将来における予防活動に貢献しようとする、また日本での類似の研究との比較の中で、日本における男性同性愛者の予防啓発プログラムの開発の一助にならんとすることを目的としたものであった。

関連団体や個人の協力を要請し、上述の三都市で協力者の確保を行い、ロサンゼルスでは15名、サンフランシスコでは30名の協力者を得ることができた。しかし残念ながらニューヨークからの協力を得ることはできなかった。

この調査によって明らかになった重要な点の一つとしては、オーラルセックスや肛門性交で、挿入するほう、あるいは挿入されるほうといった行為自体の違いによって、あるいはそういった行為を行うセックスの相手によって、それぞれの個人が取っている感染予防策のレベルが違ってきているということであった。

A. 研究目的

日本総領事館によると、1997年10月1日現在、サンフランシスコ及びサンマテオでは、計 10,590 人の日本人が滞在しており、ロサンゼルスでは、計 36,147 人である。こうした日本人コミュニティの中、ある一定の割合で男性同性愛者が生活しているわけであるが、この二つの都市に見られるゲイカルチャーの吸引力を考えると、これらの都市に住むゲイの全人口に対する割合は、平均をかなり上回るものと推察される。また、文化的、言語的、人種的、そして社会的な因子が複雑に絡み合い、日本人男性同性愛者にとってHIV感染リスクの高い状況が、これらの都市のゲイコミュニティの中に形作られているにもかかわらず、日本人男性同性愛者を対象としたHIV感染予防啓発活動は、特別に行われていないのが実状である。

こうした状況の中で、将来における予防活動や健康教育介入などに重要な情報を提供するため、まず日本人男性同性愛者がどのような性生活を営み、自分たちのセクシャリティーに対してどのような感覚を持っているのかを、明らかにしていくことが望まれている。

B. 研究方法

まずアメリカにおいて対象グループは違うが、類似した研究を行っている機関や団体の協力を得て、当研究に適合性の高い質問票を日本語で作成した。質問の内容は、基本的属性、エイズに関する基本的な知識、過去5年間の性行に関するごく簡略な質問、続いて過去3カ月の性生活についての詳細にわたる質問、加えて、セクシャリティーやコンドームイメージ、またコンドームの使用に関するセルフエフィカシーなどに関する質問であった。

対象者はサンフランシスコとロサンゼルスに短期あるいは長期滞在する日本人男性同性愛者とした。ロサンゼルスの場合は、日本人男性同性愛者のサポートグループの協力を得てその月例会に研究者が出席し、研究の趣旨を説明し協力を要請した。その上で30部の質問票を配布し、後日記入の上郵送してもらう方法を取った。引き続行ったサンフランシスコでの調査では回収率をあげるため、サーベイワーカーが協力者をリクルートし、実際に面会をし、その場で記入してもらい回収するという方法を取った。その際匿名性を確立するため、協力者の前で質問

票を入れた封筒を封印し、記録はすべて記号で行った。調査期間は1998年6月から12月までの6カ月であった。

C. 結果

基本的属性:

対象者の平均年齢は36才で、最高年齢は56才で最小年齢は21才であった。アメリカ在住期間は最短が3カ月で、最長は35年で、平均は8.5年であった。法的な婚姻関係は独身が39名、ドメスティック・パートナーが2名、既婚、別居、離婚がそれぞれ1名であった。学歴は、高校以下が1名、高校卒業が8名、専門学校卒が11名、大学卒業が16名、大学以上の学歴が8名、その他が1名であった。

属性	平均	数
年齢	平均	36
	最高年齢	56
	最小年齢	21
アメリカ在住期間	平均	8.5年
	最短	3カ月
	最長	35年
法的婚姻関係	独身	39
	ドメスティックパートナー	2
	既婚	1
	別居	1
最終学歴	高校以下	1
	高校卒業	8
	専門学校	11
	大学卒業	16
	大学以上の学歴	8
	その他	1

過去5年間の性生活について:

まずセックスの相手であるが、男性だけと答えた人が40名(89%)、男女両方は5名(11%)であった。

相手	数	割合
男性だけ	40	88.9%
男女両方	5	11.1%

次に「過去5年間で、何人の男性とセックスをしましたか?」という問いに対して、最低が1人で、最高は1000人(以上)であった。また回答拒否が8名あった。

相手数	数	割合
1-10人	14	37.8%
11-20人	6	16.2%
21-30人	5	13.5%
31-50人	2	5.4%
51-100人	4	10.8%
101人以上	6	16.2%

過去3カ月の性生活について:

次は過去3カ月の性生活についての質問である。まず最初に「主なセックスの相手」(定義:いわゆる恋人またはセックスの相手で特別な約束(コミットメント)をした人、またはいっしょに住んでいる人)がいたと答えた人は45名中26名(57.8%)であった。内19名は今もセックスをしていると答え、7名はセックスはしていないと答えている。また「主なセックスの相手」が他の人とセックスをしていると答えた人が26名中10名で、知らないが3名であった。また3名が自分のパートナーがHIV陽性であると答えている。

「主なセックスの相手」との性行為:

次に「主なセックスの相手」との過去3カ月における様々な性行為について、その中からコンドームを使わないHIV感染リスクの高い行為について以下にまとめた。この質問群では様々な性行為を列挙し、対象者がしたことのある性行為にすべて印を付けてもらった。

まず「挿入される方」のセックスで、コンドームなしでの肛門性交を行い射精されたという行為に印を付けた人が26名中4名(15.4%)おり、コンドームをつけずに肛門性交をしたが、射精はされなかったというのが6名(23.1%)いた。またオーラルセックスの場合は、フェラチオをして精液を飲み込んだというのが4名(15.4%)で、フェラチオをしたが、精液は飲み込まなかったというのが23名(88.5%)であった。

コンドームを使わない「主なセックスの相手」との「挿入される側」のセックス:

行為	射精される	数	割合
肛門性交	射精される	4	15.4%
	射精されない	6	23.1%
フェラチオ	射精される	4	15.4%
	射精されない	23	88.5%

次に挿入する側のセックスであるが、コンドームを使わず

に、挿入し射精するという行為をしたと答えた人が26名中4名(15.4%)おり、また射精しなかったが3名(11.5%)であった。またオーラルセックスでは、射精したが6名(23.1%)で、射精しなかったが23名(88.5%)であった。

コンドームを使わない「主なセックスの相手」との「挿入する側」のセックス:

性交種別	射精する	射精しない	人数	割合
肛門性交	射精する	射精しない	4	15.4%
			3	11.5%
フェラチオ	射精する	射精しない	6	23.1%
			23	88.5%

次に「主なセックスの相手」と肛門性交をしている人への質問群で、「主なセックスの相手」がいると答えた26名中、21名(80.1%)がこの質問群に回答している。その中で「挿入する側」のコンドームの使用頻度は、「全く使わなかった」と「いつも使った」が両方とも8名(38.1%)で、「時々使った」、「半分くらい使った」、「ほとんどの場合使った」がそれぞれ1名(4.8%)であった。また質問事項によって無回答があった。

「主なセックスの相手」との「挿入する側」の肛門性交におけるコンドーム使用頻度:

使用頻度	人数	割合
全く使わなかった	8	38.1%
時々使った	1	4.8%
半分くらい使った	1	4.8%
ほとんどの場合使った	1	4.8%
いつも使った	8	38.1%

次に「挿入される側」でのコンドームの使用頻度であるが、「全く使わなかった」が7名(33.3%)で「半分くらい使った」が2名(9.5%)、「ほとんどの場合使った」が1名(4.8%)、「いつも使った」が7名(33.3%)であった。

「主なセックスの相手」との「挿入される側」の肛門性交におけるコンドーム使用頻度:

使用頻度	人数	割合
全く使わなかった	7	33.3%
時々使った	0	0.0%
半分くらい使った	2	9.5%
ほとんどの場合使った	1	4.8%
いつも使った	7	33.3%

「カジュアルなセックスの相手」との性行為:

過去3カ月の性生活における、「カジュアルなセックスの相手」(定義:バーやハッテン場であったいきずりのセックスの相手)との性行為について、過去3カ月に「カジュアルなセックスの相手」とセックスをしたと答えた人は45名中27名(60.0%)であった。

その中からコンドームを使わないHIV感染リスクの高い性行為について見ていくことにする。

まず「挿入される方」のセックスで、コンドームなしでの肛門性交を行い射精されたと回答した人が27名中2名(7.4%)おり、コンドームをつけずに肛門性交をしたが、射精はされなかったというのが1名(3.7%)いた。またオーラルセックスの場合は、フェラチオをして精液を飲み込んだというのが2名(7.4%)で、フェラチオをしたが、精液は飲み込まなかったというのが19名(70.4%)であった。

コンドームを使わない「カジュアルなセックスの相手」との「挿入される側」のセックス:

性交種別	射精される	射精されない	人数	割合
肛門性交	射精される	射精されない	2	7.4%
			1	3.7%
フェラチオ	射精される	射精されない	2	7.4%
			19	70.4%

次に挿入する側のセックスであるが、コンドームを使わずに、挿入し射精するという行為をしたと答えた人が27名中1名(3.7%)おり、また射精しなかったも1名(3.7%)であった。またオーラルセックスでは、射精したが4名(14.8%)で、射精しなかったが19名(70.4%)であった。

コンドームを使わない「カジュアルなセックスの相手」との「挿入する側」のセックス:

性交種別	射精する	射精しない	人数	割合
肛門性交	射精する	射精しない	1	3.7%
			1	3.7%
フェラチオ	射精する	射精しない	4	14.8%
			19	70.4%

「カジュアルなセックスの相手」と肛門性交をしている人への質問群で、「カジュアルなセックスの相手」がいると答えた27名中、16名(59.3%)がこの質問群に回答している。その中で「挿入する側」のコンドームの使用頻度は、「全く使わなかった」、「時々使った」、「半分くらい使った」が0で、「ほとんどの場合使った」が3名(18.8%)で「い

つも使った」が11(68.8%)であった。また質問事項によって無回答があった。

「カジュアルなセックスの相手」との「挿入する側」の肛門性交におけるコンドーム使用頻度:

使用頻度	人数	割合
全く使わなかった	0	0.0%
時々使った	0	0.0%
半分くらい使った	0	0.0%
ほとんどの場合使った	3	18.8%
いつも使った	11	68.8%

次に「挿入される側」でのコンドームの使用頻度であるが、「全く使わなかった」、「時々使った」、「半分くらい使った」がそれぞれ0で、「ほとんどの場合使った」が2名(12.5%)、「いつも使った」が9名(56.3%)で、無回答が5名であった。

「カジュアルなセックスの相手」との「挿入される側」の肛門性交におけるコンドーム使用頻度:

使用頻度	人数	割合
全く使わなかった	0	0.0%
時々使った	0	0.0%
半分くらい使った	0	0.0%
ほとんどの場合使った	2	12.5%
いつも使った	9	56.3%

コンドームについて:

コンドームに対する意識、グループ規範、あるいはコンドーム使用のネゴシエーションに関する質問の結果を以下にまとめた。

まず最初に「コンドーム・イメージ」に関する質問を行い、それぞれの賛成の度合いを4段階で答えてもらった。平均値が高ければ高いほど対象グループの持つコンドームに対するイメージがポジティブであるということになる。

コンドームのイメージ:

イメージ	平均値
コンドームを使うとセックスの快感がそがれてしまう	2.4
コンドームを店で買うのは恥ずかしい	3.3
コンドームを使うのはあなたのセックスの相手をいろいろな病気から守るためにいい方法だ	3.4
コンドームはセックスの途中で破れたり抜けたりしてしまう	2.4

次はコンドームに関するグループ規範についての質問である。対象者が自分が属していると感じているグループの中で、コンドームはどのようなふう感じられ、とらえられているのか、ということ明らかにしようとするもので、これも4段階評価である。これも平均値が高ければそれだけ積極的な規範を対象者が感じているということになる。

コンドームのグループ規範:

規範	平均値
友人のほとんどはコンドームは装着感が悪いと思っている	2.6
友人のほとんどは新しいパートナーとセックスをするときは必ずコンドームを使わなければならないと思っている	3.2
最近私と同年代の人はだいたいコンドームを使っている	3.5
友人のほとんどは、自分の主なセックスパートナーも含めて、いつでも誰とでもセックスをするときはコンドームを使うべきだと思っている	3.1
友人のほとんどは、新しいパートナーとセックスをするときはコンドームを使っている	3.3

次にコンドーム使用に関するセルフエフィカシーについて質問を行った。4段階評価で、4がHIV感染から自分を守るための行動を取ることができる、そういう自信があるということで、1がその反対である。

コンドームの使用に関するセルフエフィカシー:

エフィカシー	平均値
セックスをしようとする時、コンドームを使うことを提案するのはたいていの場合私である	2.5
もしセックスの相手がコンドームを使いたくないといえば、私には(それに従うしか)あまりできることはないように思える	3.3
私は、相手がコンドームを使わないセックスをしたがっても、それを拒否することができる	3.7
性的に興奮したり気分がのっているときに、コンドームを使うのが困難なときがある	3.1

セックスやセクシャリティーについて話をすること:

自分の性生活やセクシャリティーについて、当研究の対象グループは誰とコミュニケーションを取っているのか、あるいは話しやすい相手、話づらい相手は誰なのか、といったことを明らかにしていこうとする質問である。以下の表の平均値は難易度を示すものであるが、4が大変難しいで1